



コラム

有識者の目から見た安全・安心まちづくり (36)

今回は、「ニュースの現場から」というテーマで、NPO法人奈良県防災士会防災士・NHK奈良放送局アナウンサー大川 悠介さんにご寄稿いただきました。

突然ですが、「避難勧告」や「避難指示」が発表されたとき、実際に避難したことがあるという人は、どれくらいいるのでしょうか？残念ながら、これといった根拠もなく「私は大丈夫」と考えて避難したことがないという人がほとんどではないでしょうか。人間には、「正常性バイアス」という、自分に都合の悪いことを無視したり過小評価したりする特性があるそうですが、そのせいで、助かるはずだった命が少なからず失われているという現実があります。

地震・津波、台風・豪雨、大雪、火山噴火…、自然災害がいつどこで起こるか分からない日本。災害のニュースを伝えるとき、いかに災害を「ひとごと」ではなく「自分のこと」と感じてもらうか、近年、私たちは特に意識しています。避難指示が発表されたことだけを伝えるのではなく、「避難指示は、災害の危機が迫っていて、ただちに避難するよう指示する情報です」と情報の意味を付け加えたり、「今回の豪雨は、平成 23 年 9 月の紀伊半島豪雨に匹敵する雨量です」などと、その地域に住む人が思い出しやすい過去の災害と関連づけて説明したりするようになったのは、そのためです。また、以前なら、中継車を乗り入れ、ケーブルをつないで…と、いざ放送を始めるまでに時間がかかっていた災害現場からの中継も、スマートフォンがあり、インターネット回線さえ通じれば、どこでも、現場到着と同時にすぐ始められるようになりました。単に技術が進歩したからそのような中継が増えたというだけでなく、深刻になりつつある状況をいち早く伝え、注意喚起をするという意味で、機動力のある中継を活用する機会が増えています。そのほか、土砂崩れや川の氾濫など、いま実際に起こっている災害を、瞬時に地図に落とし込んで可視化しながら伝える「リアルタイム解説」という手法も使われるようになりました。より皆さんに伝わりやすいニュースを目指して、災害報道の現場は、日々、試行錯誤です。

ただ、当然のことながら、最終的に避難などの行動をとるかどうか判断するのは、情報の受け手である皆さん自身です。技術が進んで、天気予報の精度が高まり、テレビやラジオ、インターネット、スマートフォンのアプリと、情報を得る手段も多様化した現代だからこそ、膨大な情報をどう生かし、どう自分の命を守るのか考えてほしいと思います。助かるはずだった命が失われることのない 2019 年であることを祈るばかりです。



【プロフィール】

NHK 奈良放送局アナウンサー・大川悠介

香川県高松市出身。平成 25 年、NHK に入局。鹿児島放送局を経て、平成 28 年より奈良放送局。現在、奈良県域のニュース番組「ならナビ」(平日午後 6 時 30 分～総合テレビ)でキャスターを務める。鹿児島放送局勤務時代の平成 27 年に防災士の資格を取得。「ならナビ」のコーナー「防災士大川アナのなら防災手帳」では、非常食のストック方法や気象情報の読み解き方など、身近な防災情報を伝える。